

第11回「掛川考古展」

— 大須賀の歴史 —



とき 平成28年11月30日水～12月4日日

午前9時～午後5時

ところ 掛川市立大須賀図書館 2階ギャラリー

掛川市教育委員会

大須賀の遺跡

大須賀地区では現在 34 か所の遺跡が知られています。今回は「大須賀のあけぼの」(縄文時代から古墳時代までのこと)、「焼き物の一大生産地」(古墳時代から平安時代にかけての焼き物生産のこと)、「横須賀城の発掘調査」(発掘調査で探る横須賀城のこと) の 3 つをテーマにして、遺跡から見る大須賀の歴史の一端を紹介していきます。

大須賀のあけぼの

縄文時代（約 16,500 年前～2,400 年前）

大須賀地区で、いちばん古く位置づけられるのは、縄文時代の遺跡です。

波により形成された砂丘（砂州）上に立地する石津遺跡（山崎）、小笠山から続く丘陵端部の小谷田遺跡（山崎）と愛宕山遺跡（西大渕）の 3 か所が確認されていますが、いずれの遺跡も石器のみが確認されています。そのうち石津遺跡からは、魚を捕る網のおもりと考えられる石錘が見つかっています。縄文時代には、今の海岸線より海が内陸に入り込んでいて、横須賀城から石津あたりまでは、海上に突き出した半島のようであったと考えられています。

石津遺跡に石錘を残した人々は、主に漁労を営んでいたのではないかでしょうか。

また、西大谷の普門寺には、雨乞いの祈りに使われる雷さまの太鼓棒と伝わる石の棒があります。これは、石棒と呼ばれるもので、縄文時代中期から晩期にかけて使われた祭祀具（まじないのための道具）です。

資料は非常に少ないのですが、縄文時代の人々が、確かにこの地域で活動していたことを伝えるものです。

弥生時代（約 2,300 年前～1,800 年前）

弥生時代の遺跡は、砂丘上に立地している横砂遺跡（山崎・横須賀）と天王森・古楠遺跡（西大渕）、扇状地に立地する野中遺跡（大渕）の 3 か所が



普門寺の石棒

確認されています。砂丘に立地する横砂遺跡の範囲は横須賀城跡とほぼ重なります。

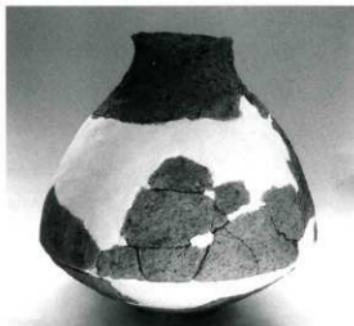
横須賀城跡の史跡整備に伴う発掘調査では、弥生時代後期（約1,800年前）の壺が数点出土しています。しかし、弥生時代の遺構は、横須賀城の造成により壊されてしまったため、よくわかっていない。砂丘上に住居を造り生活していた人々がいたのでしょうか。

出土した壺には、墓から出土する壺と同じように底部近くに穴が開けられているものがあります。そのことから、砂丘上に立地する方形周溝墓があつた可能性も考えられます。方形周溝墓は、弥生時代の墓で、死者を葬る穴のまわりに四角く溝を巡らしたもの

です。掛川市の南部地域では、兼情遺跡（海戸）でのみ発見されています。
古墳時代（約1,700年前～1,400年前）

古墳時代の遺跡は、4か所が確認されています。愛宕山横穴群（横須賀）は、県立横須賀高校の運動場拡張工事に伴い発掘調査されました。出土している副葬品である須恵器のうち、壺に三本の足がついた珍しい形のものがあります。

横穴は、丘陵斜面に横に穴を掘った墓で、古墳時代後期（約1,400年前）に導入されました。掛川地区では、本郷、下垂木、高御所、杉谷、上内田など、大東地区では中、佐東などに多く分布していますが、大須賀地区では、愛宕山横穴群と二社神社横穴群（大渕）が知られているのみです。



底部に穴のある壺



弥生時代後期の壺



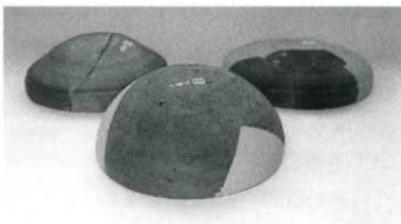
3本の足の珍しい壺

古墳時代後期には釜ヶ谷窯跡（西大渕）で須恵器の生産が始まります。大須賀地区に横穴が造られたことは、そのことと関係があるのではないかでしょうか。これらの横穴は須恵器生産を司った人の墓だったのかもしれません。

その他、古墳時代の遺物として、天王森・古楠遺跡（西大渕）からは、神社の建て替えの時に子持ち勾玉^{おがたま}が発見されています。これは、勾玉の背にいくつかの小さな勾玉が作りつけられたもので、祭祀に使われたと考えられます。



釜ヶ谷窯跡出土の壺



釜ヶ谷窯跡出土の坏蓋

焼き物の一大生産地

大須賀の歴史の中で、特徴的なことのひとつは、焼き物の一大生産地であったということです。それは、古墳時代後期（約1,400年前）に釜ヶ谷窯跡で須恵器を焼く窯が造られたことに始まります。焼き物の生産は、その後の奈良時代（約1,300年前）から平安時代（約1,200年前～800年前）にかけて盛んに行われていきます。主に生活に使う須恵器や陶器が生産されました。寺院等に使われた瓦や、祭祀に使われた土馬や人形等も作られています。



登り窯全景

窯は山崎から西大渕にかけて分布しており、その数は、50基とも100基ともいわれるほど多くあります。それらを総称して清ヶ谷窯跡群と呼ばれています。清ヶ谷という地名は陶器をあらわす「すえ」を焼く谷、すなわち「す

えがや」がなまつてできたともいわれています。この地域に多くの窯が造られた理由は、土器づくりに適した粘土と土器を焼くための燃料である松の木が豊富にあったことが考えられます。そして、当時は海が入り江となっており、船を使ってたくさんの製品を一度に運ぶことができたことも大きな理由であると考えられます。ここから現在の磐田市にあった国府や、他の地方に船により運んでいたのです。



窯跡内部の様子



捨てられた陶器

横須賀城の発掘調査

横須賀城とは

今川義元が桶狭間の戦いで織田の五代信長に討たれると、今川氏の勢力は急速に衰え、この地域の支配をめぐり武田氏と徳川氏が攻防をくり広げるようになりました。武田氏の手に落ちた高天神城を奪還するための拠点として、徳川家康の命を受けた大須賀康高により、天正8年（1580）に築かれたのが横須賀城です。天正9年（1581）、高天神城は家康が奪還し、その後廃城となり、横須賀城が遠江東南部を支配する拠点となりました。初代城主となった大須賀康高以後、明治維新により廃城となるまで、城主は松平氏や西尾氏等20代を数えます。

城は、小笠山から続く丘陵を利用し、地形を生かして東西に長く築かれた平山城です。城は、外堀と城内に配置された池によって、16世紀末に山城



西の丸の登城路

として築かれた中心の本丸、17世紀に平城として拡張して築かれた西側の二の丸、東側の三の丸と大きく3つに分けられます。

横須賀城の発掘調査

横須賀城では、昭和59年度から史跡整備のための発掘調査が行われ、その成果をもとに、本丸周辺は史跡整備されています。さらに、住宅建設等に伴う発掘調査も行われ、本丸周辺以外の横須賀城の姿も少しづつ明らかになってきています。

西の丸では、西側斜面から櫓門^{やぐらもん}と考えられる門の跡と、それに付属するらせん状の石段が発見されています。攻め込んだ敵が直進できないように、わざとらせん状にしているのです。

天守台では、天守閣の跡と考えられる8個の礎石と19か所の礎石の跡が発見されています。これらは、約2mの間隔をおいて東西6間、南北3間半の幕盤目状に並んでいました。礎石の一つには柱^{こばんめ}_{そせき}の痕跡が残っており、一辺30cmの角柱が使われていたことがわかりました。また、天守台のまわりで

発見された瓦溜まりからは、復元すると高さ1.2mになる鰐瓦^{しゃちがわら}が発見されています。天守閣の屋根に使われていたことが考えられます。

最近整備された松尾山からは、南北12m、東西4mの規模の倉庫と考えられる建物跡が発見されています。南北方向の中央部分にT字形の石列が存



本丸の調査の様子



鰐瓦が出土した様子（天守台調査）



柱の跡が残る天守閣の礎石

在しており、間仕切りのための壁があったと考えられています。

北の丸跡の中央からは、建物の北東角部分の地覆石（壁の土台石）か基壇の縁石と考えられる、直角に折れ曲がる石列が発見されています。

二の丸跡の東端部分からは、二の丸御殿の池の一部が発見されました。池の護岸の石垣が5段残っていました。この石垣の下には、沈下や崩落を防ぐために角材が敷かれています。

南外堀では、二の丸の南側で堀が奥に入り込んでいる場所が調査され、堀の護岸のための石垣が発見されました。この石垣には、現在、復元整備されている本丸と同じような丸石が使われています。

横須賀城跡の発掘調査では、建物の屋根に使われた平瓦、丸瓦等の瓦が大量に出土しています。特殊なものとしては、鯱瓦や鬼瓦、大きな墀瓦等があります。また、ヘラ書きにより、瓦が制作された年月、製作者の名前や文章が書かれたものや、顔が描かれた面白い瓦もあります。



二の丸御殿の池の石垣

開発予定地に遺跡はありませんか？ 工事計画の前に確認してください。

掛川市内には現在702遺跡が知られており、県内でもいちばん遺跡の多い市だといわれています。遺跡（埋蔵文化財）は、私たちの「心のふるさと」であり、後世の人たちに伝えていくことが大切です。

そのため、「文化財保護法」により、遺跡のある場所で、工事を行う場合には、事前に届け出をすることが義務づけられています。

届け出をせずに工事を始めたところ、遺跡が見つかったため調査をすることになり、完成が遅れてしまった——ということがないように、工事を計画する場合には、早めに掛川市教育委員会社会教育課にご相談ください。

掛川市教育委員会　社会教育課 文化財係
電話(0537)21-1158

位置図

